

◇ 国 語

国 5-1～国 5-19 まで 19 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

アメリカの心理学者であるソロモン・アッシュは、人々ほどの程度、周囲と同調してしまうのかを確かめるべく実験をしました。実験では被験者のほかに、あらかじめ同じ回答をするように打ち合わせをした七人のサクラ注を用意しました。そして問題は、図Aに描かれている線と同じ長さの線を、図Bにある三本の線から選ぶというものです。ここで、七人のサクラが不正解を選んだとき、被験者はどのくらい周囲に同調し不正解を選択してしまうかを確認するわけです。

アメリカ人に対して行ったアッシュの実験では、全く周囲と同調せず回答を続けた人間は二十六パーセントでした。周囲に流されそうにないアメリカ人も、意外と同調圧力に弱いのかもしれません。

そして、同じ実験が日本でも実施されました。横並びが好きな日本人は、もっと不正解に同調してしまいそうな気がします。ところが、ハーバード大学の博士課程にいた社会心理学者のロバート・フレイガーが、慶應大学で学生を対象に実施した実験では、周囲と同調しなかった人間が約二十七パーセントにも上ったのです。アメリカとほぼ同じだったわけです。

慶應大学だけでなく、大阪大学でも同様の実験が行われましたが、結果は似たようなものでした。日本人の方が周囲と同調するという結果を得られなかったのです。

(二) この件について、社会心理学者の我妻洋氏は次のように解釈しています。

日本人は相手の気持ちや立場や意見を付度(も)ほんたくし、相手と自分とのかかわりあいという文脈コンテクストの中で、自分の行動を規定する。その点で、「他者指向的」「集団同調的」である。だが、ここでいう「他者」や「集団」は、いうまでもなく、個人にとっていろいろな意味で重要な他者であり、個人がさまざまな仕方カタで帰属している集団である。他人なら誰でもというわけではない。否、「赤の他人」に対しては日本人は一般に無関心であり、レイタンであり、ときには敵対的テキタイでさえある。したがって、同様の学生であろうという推測はついても、実験室で初めて顔を合わせるサクラたちが、被験者にとって「意義のある他者」や「帰属集団」になりにくいことは、容易に想像がつく。(我妻洋著『社会心理学入門(上)』講談社学術文庫、一九八七年)

指摘のとおりだと思いました。

一方で、「意義のある他者」には同調するという性質は、日本人だけでなく外国人にも該当するのではとも思いました。少なくとも、意義のある他者に、どういった人々がどれほど同調するのか不明であり、日本人が特別だという考えについては

ア

にならざるを得ません。

従って、一連の実験から日本人は同調圧力を強く感じるという説を実証するのは難しく、説そのもののダトウ性が疑問視されま

(中略)

まず、多かれ少なかれ、どの国にも同調圧力が存在します。同調圧力が強かったり弱かったりする要因はそれぞれあるでしょうが、存在しないなどということは、よほど極端な社会を除いてありえないということです。同時に、同調圧力の強さを日本特有の現象と捉えるのは無理筋だと考えます。

それでは、日本の何が特徴的なのか。一言で表せば「明確な掟が少ない」という点です。共同体の数が少ないこと、曖昧なコミニケーションを好む姿勢、そして神様より人間を優先してしまう習慣は、明確な掟が生じにくい原因です。だから、その時々・場所で生じる、空気という名の掟を探ることになります。明確な掟が少ない日本では、曖昧な掟である空気が諸外国より発生しやすいのです。

また、決まりきった掟が少ないということは、緊急事態宣言のような要請によって、新しい掟を作りやすいということです。しかも、それが全国に広まりやすいということでもあります。

報道を見る限り、宗教行事によって感染が拡大するという事例が、世界各国で相次いでいるようですが、これはコロナ騒動下の自粛要請よりも、宗教組織内の強固な掟を優先させた結果です。既存の強固な掟があればあるほど、国家による要請が通じにくいわけです。

「神が与えた試練」。約2億7千万人の人口の大半がイスラム教徒のインドネシアでは新型コロナウイルスのまん延をこう捉える信者が目立つ。イスラム教徒には金曜日、モスク（礼拝所）に集まり大勢で密集し、祈る重要な行事がある。首都ジャカルタ特別州知事は3月中旬までに、金曜礼拝の自粛を呼びかけた。モスクでクラスター（感染者の集団）を発生させないためだが、徹底されていないようだ。（日本経済新聞電子版二〇二〇年四月八日付「新型コロナウイルス、宗教行事で感染拡大」）

このように、強固な掟を備えた様々な種類の共同体が諸外国にはあるため、国家による要請（掟）が浸透しにくい場所ができてしまいます。

結果、日本は諸外国と比べ、国家による要請は効きやすいもの、同調圧力が強いというわけではないという、ちよつと奇妙な結論が導かれます。

補足説明として、注意すべきことを記しておきます。それは、あるグループが共有している特定の考えが、そのまま空気になるとは限らないということです。

空気は「掟」ですから、その考えに異を唱えることは難しいし、異なる考えを持つ他のグループとの対話も困難です。裏返せば、たとえある主張を共有する人々が集うグループだとしても、それに対し自由に異を唱えられたり、他の考えを持つグループと冷静に対話ができたりするなら、そのグループは空気に支配されていません。

それと関連して群集心理にも触れておきます。群集心理とは、一人であれば決して取らない異常な行動を、群衆に属した個人に取らせてしまう心理状況のことです。皆が一斉に非倫理的・暴力的に振る舞ったり、デマを容易に信じやすくなったりと、その特徴は様々です。往々にして群集心理に陥った人々は、ある特定の言動を皆が取るため、外面だけ見ると空気に支配された集団と同じように見えます。実際、群集心理と空気の支配の両方が、同時に生じているケースもあるでしょう。

二つの集団の違いは、その特定の言動が掟になっているかどうかで判断できます。同調せずともペナルティーが科せられる恐れがないならば、そこに空気（掟）は存在しません。そして罰則がないのですから、倫理観と冷静さを取り戻せれば、その人が群集

心理から脱する道が開けます。ハーバード大学准教授 (Associate Professor) のミナ・チカラ博士も、集団では個人の倫理観が弱まることをシ^cサする実験結果を踏まえ、自らの イ な基準が、群集心理の影響を弱めるのに役立つかもしれないと述べています。

ところが、空気の場合はそうもいきません。たとえ空気の間違いに気づいたとしても、それに反すると罰を受けるリスクが生じるため、間違っていると分かっても従ってしまうのです。後述する太平洋戦争時のインパール作戦では、作戦のコウトウ無稽ぶりに勇気をもって異を唱えた人たちもいましたが、その主張がフウサツ^fされたのみならず、更迭^e等のペナルティーを受けた人さえいました。高潔な道徳心は空気の前では無力であり、群集心理と空気の支配には相違点があるのです。

混乱時における異常行動も、本質的には空気と無関係です。コロナ騒動の初期に世界各国で東洋人が差別されたように、社会に大きな不安が生じると、平時では考えられない行動を人々が取るのは世界的な現象です。デマや扇動に右往左往するのは日本人特有の行動ではありません。

ハンナ・アーレントは、そんな社会不安を背景として台頭したナチス・ドイツについて考察した哲学者です。アーレントの著書『全体主義の起源』(みすず書房)には、ナチスが社会不安を利用し支持を獲得できた理由について、沢山の重要なことが書かれています。

ここでは、同書と著作家の大澤武男氏の著書『ユダヤ人とドイツ』(講談社現代新書)を参考にしながら、ナチス支配下のドイツで出鱈目な話が信じられていった過程をごく簡単に説明します。

まず、第一次世界大戦後のドイツを襲っていた社会不安についてです。とりわけ経済において存在感を増すユダヤ人に対し、嫉妬・いらだち・怒り・恐れといった負の感情がはびこっていました。

そんなとき、ナチスは盛んに宣伝活動を行います。新聞・風刺絵・映画・果てには絵本まで使い、ユダヤ人こそが敵であるという宣伝をしかけたのです。

これを、当時のドイツ人たちは喜んで受け入れました。なにせ、自分たちの不安や恐れを解消してくれそうなストーリーです。

こうした話を信じユダヤ人が敵だと分かれば、もう怖くありません。この敵を倒しさえすれば、また素晴らしきドイツがやってくるというわけです。

この宣伝は、まさに「急所」を上手くついた仕事でした。ドイツ人の不安・恐れ・嫉妬……そして、ユダヤ人は世界支配を企んでいるとする噂話等を巧みに利用し、人々が喜んで受け入れる宣伝をしてみせたのです。

宣伝されたストーリーは、大変に首尾一貫したものでした。自分たちアーリア人（＝正義）とユダヤ人（＝敵）といった、ごく限られた要因で、ありとあらゆることを説明してしまったのです。

（物江潤『空気が支配する国』による）

注 サクラ ……主催者側に雇われ、その意図に沿った雰囲気作りに率先して協力する者。陰ながら誘導・扇動する者。

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A レイタン

- ①失敗にラクタンする
- ③精神をタンレンする
- ⑤タンスイに住む魚

- ②経営がハタンする
- ④タンセイな顔立ち

1

B ダトウ

- ①ダキすべき行為
- ③政治がダラクする
- ⑤おつかいのダチン

- ②安易にダキョウする
- ④ダセイで歩き続ける

2

C シサ

- ①自殺キョウサの罪に問われる
- ③年齢をサショウする
- ⑤サトウを控えた菓子

- ②上空からサツする
- ④課長をホサする

3

D コウトウ

- ①美酒にトウスイする
- ③トウトツな質問
- ⑤トウメイなガラス

- ②カトトウに苦しむ
- ④兵士をトウソツする

4

E フウサツ

- ①貿易マサツが生じる
- ③敵をテイサツする
- ⑤インサツされた文字

- ②動画をサツエイする
- ④サツイを抱く

5

問二 空欄 ア・イ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア

- ①恣意的
- ②合理的
- ③懐疑的
- ④肯定的
- ⑤逆説的

6

イ

- ①打算的
- ②暫定的
- ③社交的
- ④暴力的
- ⑤道德的

7

問三 傍線部 (a) 「周囲と同調してしまう」とあるが、これと同じ意味を持つ四字熟語を、次の①～⑤の中から一つ選べ。

8

- ①我田引水
- ②付和雷同
- ③鶏口牛後
- ④海千山千
- ⑤竜頭蛇尾

問四 傍線部 (b) 「付度」・(c) 「更迭」の意味を、次の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(b) 付度

9

- ①他者の言動を疑わずに受け入れること
- ②他者の言葉を歪曲して解釈すること
- ③他者の状況を理解したふりをする事
- ④他者の心中を推し量って配慮すること

(c) 更迭

10

- ①ある地位・役目にある人を他の人と代えること
- ②ある地位・役目にある人の発言権を奪うこと
- ③ある地位・役目にある人を辞職させること
- ④ある地位・役目にある人を降格させること

問五 傍線部(二)「この件」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

11

- ①日本人の中にもアメリカ人と同様に、サクラの正体に気づいた結果、正解を選ぶ者が三割近く存在したこと
- ②日本人の中にもアメリカ人と同様に、サクラの選択に誘導される形で正解を選ぶ者が三割近く存在したこと
- ③日本人の中にもアメリカ人と同様に、サクラの回答の影響を受けずに正解を選ぶ者が三割近く存在したこと
- ④日本人の中にもアメリカ人と同様に、サクラの選択に同調を見せず不正解を選ぶ者が三割近く存在したこと

問六 傍線部(二)「日本は諸外国と比べ、国家による要請は効きやすい」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

12

- ①日本には外国と比べて明確で強固な掟の数が少なく、国による要請よりも重要視されるものがないから
- ②日本には国家権力への反発心を持つ者が多いが、それらが一丸となって同調圧力となるには至らないから
- ③日本では国民の政治に対する関心度が低く、国家の要請に対して異議をとなえる者がほとんどいないから
- ④日本では国の要請には従うべきという封建的な考えが古来より存在し、その名残が現在も残っているから

問七 傍線部(三)「空気になる」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

13

- ①ある考えがもつとも適切なものとして多くの人に広く受け入れられ、それが世間に定着するようになるということ
- ②ある考えが曖昧でありながら強い支配力を持った決まりとして作用し、人々の同調を促すようになるということ
- ③ある考えが平凡なものとして看過される一方、実はそれが人々の生活において欠かせないものになるということ
- ④ある考えが明確な掟として強い効力を持ち、異を唱えることが困難なほどに人々を支配するようになるということ

問八 傍線部(四)「出鱈目な話が信じられていった過程」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

14

- ①ユダヤ人が世界支配を企んでいるという計画を察知したナチスは、民衆の警戒心を高めるために話に尾ひれをつけ、実際にはない話をもでっち上げて、ドイツ人にユダヤ人を敵とみなすよう促した。
- ②ナチスは、ユダヤ人の経済的活躍を陰で支援してドイツの民衆の反感を喚起し、その後ユダヤ人に対する悪印象を決定づけるような噂を捏造・宣伝し、ユダヤ人をドイツ人の敵だと認識させるよう仕向けた。
- ③ナチスは強固な支配体制のもと、ユダヤ人を買収して社会不安を煽る役回りを演じさせ、それによってユダヤ人がドイツ人にとっての敵だとするデマをまことしやかに流布させていった。
- ④ドイツでユダヤ人の経済的台頭を否定的にとらえる雰囲気は漂う中、ナチスはその社会不安に沿う形でユダヤ人を敵だと思わせるための宣伝を行い、ドイツ人にそのデマを信じさせるに至った。

問九 本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。

15

- ① 混乱時における異常行動が空気と密接に結びついていくことに着目した哲学者のハンナ・アーレントは、社会不安と通じる空気が漂っている時ほど人々が異常行動に走りやすい傾向があることを指摘した。
- ② 他者との和を重んじる日本では欧米よりも同調圧力が強いが、イスラム教徒の同調圧力はそれよりもさらに強く、たとえ新型コロナウイルスが流行する状況であっても集団礼拝の儀式を欠かすことがない。
- ③ グループの構成員が同じ考え方を共有し、統一された行動を取っていたとしても、考え方の異なったグループと冷静に対話ができるのであれば、そのグループは空気に支配されていないといえる。
- ④ 太平洋戦争時におけるインパール作戦は、その内容が現実味に欠けるものであったにもかかわらず、日本人特有の群集心理が作用したことによって、強引に実行に移されることとなってしまった。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

一九六〇年代にさかのぼるサイボーグのイメージは、いまでもケンザイだ。重い荷物を運べるパワードスーツ、機械と脳をつなぐブレイン・マシン・インターフェイス(BMI)、人工心臓に人工知能。かつてのフィクションは、次々に現実となっている。機械でもなく人間でもない、「怪物的世界」「ハラウエイ二〇〇」が到来したのだろうか。

ギョウギョウしいイメージをつくりあげる前に、立ち止まって考えてみよう。サイボーグとは、技術と生体とのハイブリッドのことだ。では、競技用の義足やダイビング用のタンクを身につけた人はどうだろう。アの密接なかわりは、最先端の技術に限った話ではない。ナイフや入れ歯は古くから存在していたし、杖、靴、眼鏡だって、身体能力を補い増強する立派な技術である。私たちは昔からすでにサイボーグだったのだろうか。

たしかに、サイボーグのイメージと、たとえば眼鏡をかけて過ごす日々の生活は、すぐには結びつかない。眼鏡をかけて外を歩いていても誰も気に留めないし、うっかりすると、眼鏡をかけていることを忘れたまま、どこに置いたか探してしまうことだってある。その瞬間、眼鏡をかけて目の前に現れている世界は、「世界そのもの」のように感じられている。技術はあたかも身体の一部のようであり、両者のあいだの境界はわかりづらい。あまりに自然に感じられるこうした技術を、わざわざサイボーグと呼ぶ必要はないだろう。ナイフを手にするのでつくりだされる世界、杖を使うことではじめて感じられる世界についても、同じことがいえる。

では、それが色眼鏡だったらどうだろう。そこで見えているのは、技術がつくりだした、人工的で、ゆがめられた世界なのではないか。とたんに、それは「世界そのもの」ではないと言いたくなってくる。遺伝子を改変して害虫を寄せ付けなくなった植物の種は、人工物であつて「自然の」種ではない。記憶力を高める薬を飲んで試験を受けても、それは「本当の」能力ではない。ズルだ、偽物だ、そんな声も聞こえてきそう。技術の問題には、世界へのかかわり方にまつわるこうした緊張感がたしかに漂っている。

このとき、自然と不自然、本物と偽物のあいだには、ちょうど、イのあいだにあるのと同じ差異が感じとられてい
ることを確認しておこう。眼鏡をかけた人は依然として人だけれど、サイボーグになってしまったらもう人ではない、というよ
うに。機械につながれた人をサイボーグと呼びたくなるのは、その存在が、人と呼ぶにはあまりに不自然に感じられるからだ。
逆に、眼鏡をかけた人や靴を履いた人をあえてサイボーグと呼ばないのは、そのことで人の本性に変化が生じているように感
じられないからだろう。

だが、ウな感覚なのだろうか。サイボーグ
であることがあたりまえの世界で、そのことに慣れてしまえば、眼鏡でみる世界と眼でみる世界のあいだに本質的な差異などな
いのではないか。不自然に感じられているだけで、じつは自然なことではないだろうか。それならば、なぜ不自然に感じたりす
るのだろうか。

技術と人の関係を考えるには、この自然と不自然の感覚からはいったん距離をおいてみたほうがよいのかもしれない。代わり
に、人はもともと技術的な存在であったという歴史的な事実を確認することからはじめてみよう。人類学における技術論は、私
たちをそうした理解へ導いてくれる。

人を「道具を作る動物」と呼んだのは、アメリカ合衆国建国の父とも言われる、ベンジャミン・フランクリンである。フラン
スの哲学者アンリ・ベルクソンは、ここからさらに、人間的な知性の定義の中心に道具の製作を位置づけた「ベルクソン ニ〇一
〇」。人は、ホモ・ファベル（工作する人）であることによつて、他の動物から区別される。人の知性とは、道具を作るための道具
を製作し、そしてその行為を無制限に変化させる能力のことである。

この定義で強調されているのは、道具の製作や使用そのものというよりは、それらを作り出す際限のない能力である。サルや
チンパンジーもまた、石や棒といった単純な道具を用い、さらにはその使い方を工夫したり伝達したりすることが知られている。
人がそうした動物と区別されるのは、人が道具を使用するときに、記号システムや言語といった意味の領域や、意図や
ヒヨウシヨウといった複雑な心的機能とのかかわりがみられるからだ。わかりやすいえば、人が道具にかかわるとき、そこに

は「心」が想定されている。この意味で、技術は、言語とはまた異なる仕方では世界を把握し、そして世界をつくりだす、すぐれて人間的な方法なのである。

人類学の分野で技術の問題を正面から扱ったのは、フランス人の人類学者マルセル・モースである。ベルクソンと同時代人でもあったモースは、先に引用したホモ・ファベルの定義にふれながら、技術をまずは身体とのかかわりでとらえている。たとえば、歩き、走り、眠るといふ何気ない動作には、目的や状況に応じた特定の身体の使い方があつた。枕を使って眠る、ハンモックで眠る、馬の上で眠る、立ったまま眠る、といった具合だ。モース自身は、歩きながら眠つたことがあるときさえ記している。道具の使用に先立つようした身体の使い方は、「身体技法」と呼ばれる。身体技法は、目的の達成にとつて有効なものであり、また伝承される「モース一九七六」。

これに対して、身体の外側に独立した機能として作り出されたモノを、「道具」、その複雑な構成を「技術」と呼ぶことができる。手で紙を半分に切るときに私たちがする動作が身体技法だとすれば、同じ作業をするためにペーパーナイフを製作するのは、技術（道具）の発明である。

技術の特性について、モースは「相互的因果」というガイネンを提起している。「モース二〇二二」。人は、ある動作や技法の延長線上に技術を作るだけでなく、作り出された技術によつてみずからが影響を被るといふ、反対方向の関係性に同時にまきこまれているということだ。たとえば、先の尖つた石器（尖頭器）は、大型の動物を仕留めるために用いられた旧石器時代の代表的な道具であるが、同時にそれは、狩猟という社会的行為を可能にし、狩猟社会が成立するためのエな条件ともなつた。石器やそれを用いた狩りの技術がなければ、人は大型動物を仕留めることができなかつただけでなく、一定規模の社会を営むこともできなかつただろう。この双方向に展開する関係性が、モースにとつて、人や社会を理解するための糸口となるのである。

このとき人は、知性の本質や、動物との本性上の差異を定義することによつてではなく、むしろ、技術との関係にまきこまれた具体的な生のあり方として理解されている。技術は、ただ便利な道具であるとか、身体機能を拡張させる人工物というだけではない。また、人は、技術を作ることができる優れた知性を本来的に備えているから人なのだといふわけでもない。技術を手に

することで「ヒト」から「人」になったのであり、人と技術は、何重にも折り重なった相互的因果の連鎖のなかでしかとらえることができない存在なのである。

この相互性は、尖頭器や斧^{おの}といった素朴な技術だけでなく、文字や地図といった、より複雑な技術、そして技術の複合体としての機械やシステムについても、同様に考えることができる。人と技術のあいだに一方向の関係性しか想定できなければ、自然や不自然についての私たちの思考ははるかに限られたものになってしまうだろう。

冒頭でふれたように、色眼鏡でものをみていることに気がつかないくらいに世界が自然に感じられてしまうとき、技術と自然はもはや区別することができなくなる。目覚まし時計の音で目を覚まし、電車に乗って通学し、パソコンを開いて課題のレポートを書くといった、そうした日常にも高度な技術は潜んでいるのだが、この明らかに人工的な生活環境を、私たちは日常的に不自然なものと感じてはいない。大雪で電車が止まってしまうようなときに初めてその便利さに気づくというくらいに、技術は日常の一部となっている。このとき私たちは、技術的な世界でこそ本来の生活をまっとうしているのだと考え、このあたりまえの世界を成り立たせている条件について考えようとしていない。

他方で、人や社会は技術によって条件づけられているのだと強調しすぎることにも問題がある。たとえば、遺伝子操作によって新しい生命を誕生させることは、現代の技術水準ですでに実現可能である。それにもかかわらず、人の体細胞からクローンを誕生させようという実験が固く禁止されているのはなぜだろうか。人や社会は、無際限に技術によって変えられているわけではないのだ。このとき私たちは、「人の本性」を、技術とは別の位相で考えていることになる。

技術によって人の生活が成り立っており、同時に、人の生活のなかからその必要に応じて技術が作り出されている。この相互的因果を考えることは、人と世界のかかわりを考えることにほかならない。

(松村圭一郎ら編『文化人類学の思考法』所収、山崎吾郎の文による)

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ケンザイ

- ① ケンチクカの設定
- ③ ケンキヤク自慢の父
- ⑤ ケンチョな兆候

- ② ケンジツな手段を選ぶ
- ④ 女性のユウケンシヤ

16

B ギョウギョウしい

- ① サンギョウ革命
- ③ 和装のニンギョウ
- ⑤ 月のギョウカクを目測する

- ② ギョウギ作法
- ④ うまみをギョウシユク

17

C シヤクゼン

- ① 論語をコウシヤクする
- ③ 地図のシユクシヤク
- ⑤ バンシヤクの相手をする

- ② 永久ジシヤク
- ④ お金をハイシヤクする

18

D ヒョウシヨウ

- ① 功労をケンシヨウする
- ③ ショウケイ文字
- ⑤ 試合にシヨウジュンを合わせる

- ② 理論のケンシヨウ
- ④ ジュシヨウの喜びを語る

19

E ガイネン

- ① 先駆者のキガイを示す
- ③ 偉人のシヨウガイ
- ⑤ ゾンガイ早い解決

- ② カンガイにひたる
- ④ 不正をダンガイする

20

問二 空欄

ア

イ

ウ

エ

に入る最も適当なものを、次の各群の①～④あるいは①～⑤の

中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア

- ① 技術と生体
- ③ 機械と人間

- ② 人間と技術
- ④ フィクションと現実

2 1

イ

- ① 眼鏡と色眼鏡
- ③ 眼鏡とサイボーグ

- ② 遺伝子を改変した種と自然の種
- ④ 記憶力を高める薬と試験

2 2

ウ

- ① 主体的
- ④ 本来的

- ② 自主的
- ⑤ 機能的
- ③ 進化的

2 3

エ

- ① 物理的
- ④ 暗示的

- ② 精神的
- ⑤ 選択的
- ③ 心理的

2 4

問三 傍線部 (a)・(b) の本文中の意味として最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(a) 身体技法

- ① 歩く、走る、眠るという動作
- ② 道具の使用に先立つ身体の使用方
- ③ 目的や状況に応じた身体の使い方
- ④ 手で紙を半分に切る動作

25

(b) 色眼鏡

- ① 着色レンズをはめた眼鏡
- ② 偏ったものの見方
- ③ 先入観に捕らわれたものの見方
- ④ 差別的な考え方

26

問四 本文を二つの大きなまとまりに分けるときの、その切れ目になるのはどこか。「後段の書き出し」として最も適当なものを、また、その「後段の見出し」として最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(後段の書き出し)

- ① このとき、自然と不自然
- ② 人を「道具を作る動物」と呼んだのは
- ③ 人類学の分野で
- ④ 技術の特性について

27

(後段の見出し)

- ① 自然と不自然の境界
- ② 身体技法と道具
- ③ 無際限の技術
- ④ 相互的因果

28

問五 傍線部（二）「すぐれて人間的な方法なのである」とあるが、技術はどのような点で人間的だと言えるのか、筆者の考えに最も近いものを、次の①～④の中から一つ選べ。

29

- ①人には、道具を製作する際限のない能力があるという点
- ②人が道具を使用するときには、その使い方を工夫したり伝達したりするという点
- ③人が道具を製作するときには、複雑な心的機能との関係がみられるという点
- ④人が道具を製作し、使用するときには、複雑な心的機能との関係がみられるという点

問六 傍線部（二）「何重にも折り重なった相互的因果の連鎖」とはどういうことか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

30

- ①人は、特定の動作や技術の延長線上に技術を繰り返し生み出すということ
- ②人は、自分たちが製作した道具や技術によって、その影響を受けるということ
- ③人は、道具を製作するだけでなく、生まれた道具やその技術によってますます人らしくなるということ
- ④人は、道具を製作する知性を生まれながらに備えており、その製作を止めることがないということ

問七 傍線部（三）「人や社会は技術によって条件づけられているのだと強調しすぎることにも問題がある」とあるが、それはなぜか。最も適当な理由を、次の①～④から一つ選べ。

31

- ①人の社会は技術を生み出すことはあっても、その影響を受けることはほとんどないと考えられるから
- ②人の社会が技術の影響を受けているというあたりまえのことに気づいていない人があまりにも多いから
- ③人の社会は自らが生み出した技術の影響を受けるが、その影響をあえて排除しようとする知性が人にはあるから
- ④人の社会を変革できる技術の力を過信するあまり、人として大事なことを見失ってしまったことがあるから